

6 『ネガティブ・ケイパビリティ
——答えの出ない事態に耐える力』

「伝えること」の過程で大きな力となる「共感」は、それが安直に用いられると、たちまち「分断」へ直結する危うさをはらむ。特に慎重にすべきは、容易に答えの出ない事態をめぐるふるまいだ。小説家で精神科医の著者が説く“ネガティブに耐え得る共感の力”は、日々消費される安易な情報への堀氏（2頁）の警鐘とも軌を一にするだろう。

常木蓬生=著
朝日新聞出版／2017年



7 『信頼学の教室』

今日、情報発信に強く求められる「信頼」の価値。特に危機状況下で発信者の「能力」「動機づけ」以上に重要なのが、受け手との「価値共有」だと著者は言う。受け手を単なる「道具」としないために価値構築のプロセス&帰結を共有せよとの主張は、堀氏（2頁）の言う「分断」回避のための「小さな主語」の重要性とも通じるものがある。タイトルの通り心理学の講義形式の展開で、読みやすい一冊。

中谷内一也=著
講談社現代新書／2015年



8 『非対称情報の経済学
——スティグリッツと新しい経済学』

教育現場の「伝えること」に関し、山下氏（32頁）が重視する情報伝達の中立性。これを経済学の面で研究し、ノーベル賞を受賞したのが米国のジョセフ・スティグリッツだ。売り手と買い手との間の商品情報の格差、それが取引行動へと及ぼす複雑な影響を平易に論じた本書は、広く社会におけるコミュニケーション理解の手引きともなる。

蔽下史郎=著
光文社新書／2002年



9 『目の見えない人は世界をどう見ているのか』

美学・現代アートを専門とする著者が、視覚障がい者との対話を通じて、彼らが世界をどう「見て」いるかを探る身体論。目の見える・見えないにより、空間認識や感覚、身体を使い方、言葉やコミュニケーションがどう変わるのかを紐解き、読者にその「見え方」を想像させる。「違い」をおもしろがり、ポジティブに捉える姿勢から、障がいとの新しい関わり方や社会的価値を提示していく。

伊藤亜紗=著
光文社新書／2015年



10 『世論』

ステレオタイプの概念を提唱したアメリカのジャーナリスト・リップマンによる、20世紀メディア研究の源流となった基礎文献（1922年刊行）。人びとが報道により編まれた「疑似環境」に基づいて政治的判断を行うことを指摘し、メディアが作り出すイメージと現実との乖離、複雑な世界を単純化する認知的枠組みとその危険性を解明し、世論操作のメカニズムを体系的に論じる。

ウォルター・リップマン=著 掛川トミ子=訳
岩波文庫／1987年



1 『メディア論
——人間の拡張の諸相』

佐藤氏（26頁）も言及するメディア論の大家マクルーハンの代表的著作（1964年刊行）。「メディアはメッセージである」という有名なテーゼを展開し、情報の内容よりもメディアの形式や特性こそが人間の感覚・思考様式に本質的な影響を与えると論じた。メディアを人間の身体機能の拡張と捉え、現代メディア論の出発点ともなった一冊。

マーシャル・マクルーハン=著 栗原裕、河本仲聖=訳
みすず書房／1987年



2 『変動する総合・探究学習
——欧米と日本 歴史と現在』

教育現場における「伝えること」が変わりつつある（32頁）いま、変化への大きな柱となったのが90年代以降の「総合・探究」に向けた改革だ。子どもたちの主体性を引き出す中立的な学びのあり方について、内外の具体的事例を豊富に引きつつ論じる本書は、コミュニケーションのより良い未来を探るデータと示唆に満ちている。

伊藤実歩子=編著
大修館書店／2023年



3 『NEXUS——情報の人類史
上：人間のネットワーク、下：AI革命』

『サビエンス全史』の文明史家による大著。人類と情報の原初的な関係と10万年に及ぶ歩み、特に「物語」性をもつ巨大な力をAIの脅威まで視野に入れて論じた多角的内容は、「伝えること」を考える際に必須の視点と概念に満ちている。山下氏との対談（32頁）でも触れられた、世代や地域、分野や価値観を超えた情報伝達の条件を学ぶうえで最適だ。

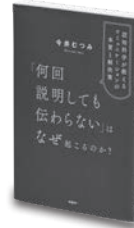
ユヴァル・ノア・ハラリ=著 柴田裕之=訳
河出書房新社／2025年



4 『「何回説明しても伝わらない」はなぜ起こるのか？
——認知科学が教えるコミュニケーションの本質と解決策』

「なぜ伝わらないのか」を認知科学と心理学の視点から解き明かす一冊。物事が正しく伝わらない原因は言い方だけでなく「知識や思考の枠組み＝スキーマ」の存在が背景にあると説く。人それぞれにスキーマというフィルターがあり、認知能力にも曖昧さがある。その前提を理解することが、円滑なコミュニケーションへの第一歩だとわかる。

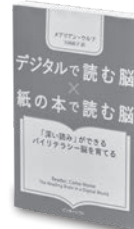
今井むつみ=著
日経BP／2024年



5 『デジタルで読む脳×紙の本で読む脳
——「深い読み」ができるバイリテラシー脳を育てる』

脳科学と教育学の視点から、デジタル媒体と紙媒体が脳に与える影響を分析。デジタル媒体による速読性や情報検索能力の向上を認めつつも、紙媒体の読書が培う「深い読み」の重要性を説く。特に読解力・批判的思考力・共感性は紙媒体での読書体験こそが育むとの指摘は、ZINEの作り手が感知する紙媒体の価値を裏付けるのではないだろうか。

メアリアン・ウルフ=著 大田直子=訳
インターシフト／2020年



「伝えること／伝わること」を 考えるための10冊

情報技術の進展とともに、「伝えること」も「伝わり方」もさま変わりする昨今、
私たちはいかにして相手に伝え、また、伝えられた情報を受け止めればいいのか。
今号の特集の理解を深める10冊を紹介します。

